基幹共同研究 1
非文字資料研究ネットワーク形成研究

ネットワーク形成の方法

――多摩美術大学芸術人類学研究所・文化女子大学ファッション文化研究機構の事例から――

中　町　泰　子
NAKAMACHI Yasuko

はじめに

非文字資料研究ネットワーク形成研究活動では，当センターが中核となり，非文字資料に関する世界的なネットワークを形成し，世界各地の非文字資料を研究する研究者と共同研究を展開することを目標に掲げている．筆者個人の研究調査では，その高い目標である，海外の非文字資料を研究する各研究機関や研究者個人とのやりとりを進める段階まで到達することはできなかったが，その布石とするため，国内の非文字資料を研究する 2 機関，多摩美術大学芸術人類学研究所（八王子市鑓水）と文化女子大学ファッション文化研究機構（東京都渋谷区）を訪問した．そこでは研究機関の活動内容と，国内外の研究ネットワーク形成の方法と現況，研究成果などをヒアリングし，こちら側としては，非文字資料研究センターの出版刊行物を携え，これまでの活動を伝えて情報交換を行った．本稿では，上記二つの研究機関の概要や活動内容を紹介した上で，訪問時に気付いた点をもとに，我々ネットワーク形成班が今後の可能性を拓くために取るべき方法について考察したい．

1　多摩美術大学芸術人類学研究所

概要

芸術人類学研究所は，2006 年 4 月に，多摩美術大学八王子キャンパス内メディアセンター 4 階に開設された．英語では Institute for Art Anthropology（略称 IAA）である．「芸術人類学」とは「芸術（Art）」と「人類学（Anthropology）」をつなぎ合わせた造語であり，所長中沢新一が，それまで展開してきた「対称性人類学」を基に新たに提唱した，人文諸学の再構築を目的とする，芸術と人類学

写真 1 「芸術人類学研究所」提供 IAA

を融合させたサイエンスである．単に芸術に関わる諸学と人類学とを融合させるのではなく，芸術行為を基軸とした様々な創造的実践と結び付きながら，人間の心の諸活動を探る．目標には，人類の創造に関する諸問題を芸術と文明の関係において究明し，日本ばかりでなく，広く世界の芸術界・思想界に資することを掲げている．（写真 1）

研究員の構成

多摩美術大学の専任教員 7 名を中心に組織され，客員研究員は 3 名，特別研究員が 40 名である．

所長中沢新一（人類学者），所員には，平出隆（詩人），港千尋（写真家），鶴岡真弓（ケルト芸術研究者），長谷川祐子（キュレイター），安藤礼二（文芸評論家），椹木野衣（美術評論家）がいる．客員研究員には，高木正勝（音楽家），宮崎信也（僧侶），千歳栄（民俗宗教研究家），特別研究員には，大淵靖子（ホースアーティスト），佐久間寛厚（アトリエ・エレマン・プレザン東京主宰者），川瀬慈（映像人類学者）など専門や活動履歴が多彩で様々な 40 名が在籍する．

研究所の事業

・芸術人類学に関する研究・調査
・国内外の芸術人類学研究者との学術交流の推進
・刊行物等による芸術人類学研究情報の相互活用・共有化と公開
・研究会，講演会，講座，国際研究集会などの開催
・国内外の芸術人類学研究者の育成・援助
・芸術活動・文化財等保存運動の支援とアーカイヴ化
・その他，芸術人類学研究所の目的に相当する事業

写真 2　ポスター

「国内外の芸術人類学研究者との学術交流の推進」，「刊行物等による芸術人類学研究情報の相互活用・共有化と公開」，「研究会，講演会，講座，国際研究集会などの開催」，「国内外の芸術人類学研究者の育成・援助」とは，国内外のネットワーク形成がなければ進められない事業である．「世界各地の非文字資料研究を行う研究者を把握し，研究協力者として組織し，具体的な課題について国際的共同研究を開始すること」を目標にする非文字資料研究センターとは，ネットワーク形成への同じ努力を重ねているであろうことがうかがわれる．

活動内容

開所記念シンポジウム「石田英一郎の夢 ── 芸術人類学研究所の旅立ち ──」は，2006 年 6 月 3 日（土）多摩美術大学八王子キャンパスで開催された．（写真 2）

パネリストに吉田禎吾（東京大学名誉教授），小松和彦（国際日本文化研究センター教授）を迎え，中沢新一，鶴岡真弓との討論を行った．tamabi.tv で視聴することができる．

芸術人類学研究所は７つの研究領域（基礎部門＋６つの部門）を持ち，それぞれが有機的に結び付いて，「芸術（Art）」「霊性＝贈与（Spirituality ＝ Gift）」「経済（General Economy）」の三位一体の構造を様々な形で表現していく．具体的には，人類の根源的な心の構造と芸術表現の関係を探る研究のほか，環太平洋神話学，贈与経済学，里山研究，野外をゆく詩学，ユーロ＝アジア美術文明史，平和学の構築などである．また，ダウン症の人達の芸術作品を研究，発信する「ダウンズタウン・プロジェクト」を開所以来積極的に推進している．ネットワーク形成に注目しながら，さらにそれぞれの活動を見ていきたい．

①神話の生命力

環太平洋諸民族の深い繋がりについて考察し，レヴィ＝ストロースが進めたアメリカ先住民神話の構造研究を，環太平洋地域まで拡大して推し進め，日本文化の本質，アジア太平洋諸民族の繋がり，アメリカ先住民文化と日本文化の関係などの解明を目指す．

②野外をゆく詩学

全国の史跡や貴重な資料保存庫を繋いだ「小さな聖地のネットワーク」を作る．芸術人類学研究所を核とする「フィールド・ミュージアム・ネットワーク」（FMN）の実現を目指すと共に，各地の市民・自治体による保存運動と連携し，研究，講演，展示，アーカイヴ化などを企画する．正岡子規邸を聖地の一つに据え，文学が生まれた空間の重層的意味を明らかにするワークショップ，シンポジウムが既に開催された．この研究部門は平出隆（詩人）が率いる．下記の平出の FMN を語る言葉からは，既に文学館が 600 箇所もありながら，これまで自由に相互には繋がってこなかったという問題が明らかにされる．また，各地に点在する市民や自治体，機関と繋がることには，研究者同士で結びつくこととは異なる難しさがあるのではないかと推測される．非文字資料研究センターのネットワーク形成にも示唆的な活動と思われ，今後の FMN のネットワーク形成の過程や可能性が期待されるため興味深く，ここに引用してみたい．

> 《フィールド・ミュージアム・ネット》構想とは，全国各地に点在する「文学の家」「芸術の家」「哲学の家」など，過去の優れた精神の痕跡を示す場所や，その貴重な資料保存庫などを選定・認定し，「小さな聖地」のネットワークとして，各拠点を結ぶものである．また，すでに当地で行なわれている市民・自治体等による保存活動と連携し，研究や講演，展示，アーカイヴ化，その他の企画を，多摩美術大学芸術人類学研究所独自のプログラムとして注入し，その周辺をふくむ文化資源を息づかせ，現地の声や資料の息吹を汲みあげ，ネットワーク全体へ還流させることも行う．一般に文学館の活動の目的は，資料の収集・保存・展示・研究であるとされている．
>
> また，全国文学館協議会に加盟している文学館は，列島でおよそ 90 を数え，作家の旧居や図書館の一部を記念館や資料館としているものをふくめると，600 に及ぶとされている．ところが，これらが個別の，しかも互いによく似通った困難を抱えているのが実状である．いいかえれば，

それらが自由で相互に啓発的なネットワークをつなぎあう場合は，まだ少ないといえるだろう．たとえば，異なる文学館同士が結びつけられる理由としては，作家が同一であること，自治体や地域が同一であること，形式や分野が同一であること，といったさまざまな括りが機能することはあっても，芸術の発生やその在りかたをめぐる，批評的で，また原理的でもある一定の思考・研究によって互いをつなぐという場合は，少ないといえるだろう．

《フィールド・ミュージアム・ネット》にとっては，文字通り《フィールド》や《野外》という概念に重きがある．文学館であることが対象となるのではなく，旧居や史跡そのもののもつ直接的な，唯一無二な空間性や現場性が対象となる．さらには，そのような場所が一極的に特権化されるものではないことも重要である．（中略）ひとりやひとつを絶対化しないことで，多極的なネットワークとすることができる，というふうに考えて進みたいのである．（平出隆「《フィールド・ミュージアム・ネット》その構想と着手」）

③芸術の発生学

ダウン症やサバン症の人達の絵の創造過程を参与研究し，人類の表現活動が生まれる創造過程を探る．また，認知考古学や洞窟絵画などの研究から，対称性人類学が開いた新しい芸術の思想を発展させる．この部門は，ダウン症の人達のアトリエ「アトリエ・エレマン・プレザン」主宰の佐藤よし子，佐久間寛厚といった美術指導者とそこに通うダウン症の人々（ダウンズと呼ばれる）の協力を得て，彼らの作品を通して共同研究を行っている．「野外をゆく詩学」もそうだが，この部門の活動を見ると，研究のネットワーク形成とは，研究機関や研究者を中心に繋がるだけではなく，時に様々な市民や自治体と共に手を結び，共同で進むことが必要とされることがあるのだと気付かされる．

④ユーロ＝アジアを貫く美の文明史

ヨーロッパとアジアの美術文明史を再考証し，新しい美術史の概念を作る．これまでの西洋中心の美術史の思考法を見直し，人類史的な視点に立つ．

⑤生命と脳

脳を出発点に，ニューロンの構造の変化による心の発生，心の本質を現実へと出現させた宗教と芸術へと探究を深め，人間の活動をとらえる．「華厳思想プロジェクト」として，古代思想が発見した生命と脳をつなぐ論理形式を現代科学と結合させる．華厳思想研究，南方マンダラの研究，鈴木大拙ノートの発掘が行われている．

⑥平和学の構築

平和の概念を芸術人類学的な視点から組み立て直す．平和と戦争の概念の芸術人類学的探究を進める．

IAA スタッフである金子雅是氏に海外とのネットワーク形成についてうかがったところ，研究者個人の活動の中で，ロンドン大学 SOAS 日本文化研究所や，セインズベリー日本文化研究所（イギリス）との繋がりがあるという回答だった．IAA 研究員が図録などに協力した展示に，大英博物館

における「The Power Of Dogu」展（2009 年 9 月 10 日（木）～11 月 22 日），日本においては東京国立博物館で開催された「国宝　土偶展」（2009 年 12 月 15 日（火）～2010 年 2 月 21 日）がある．パリ大学やマンチェスター大学グラナダ映像人類学センターといった研究機関と関係がある研究員もいるが，それぞれの研究歴の中からそれまでに培った活動，人脈が生きることにより，海外の研究者がIAA を訪問し，協力するといった状況が生まれているようだ．それは既に結ばれていた個人的研究ネットワークを基盤にした交流，協力関係であり，一度も会ったことのない海外各地の研究者と研究所がコンタクトを取り，共同研究にこぎつけた例はまだないとのことであった．やはり研究目的のネットワーク形成であれ，まずは人間関係の構築が始まりなのではないだろうかと考えさせられた．

2　文化女子大学ファッション文化研究機構

概要と目的

2008 年に，文部科学省平成 20 年度「人文学及び社会科学における共同研究拠点の整備の推進事業」において，文化女子大学に「服飾文化共同研究拠点」の設置が採択された．

これまで文化女子大学が蓄積してきた貴重図書，服飾資料，映像資料などの研究リソースを研究者が有効に活用できる体制を作り，分野横断的な共同研究を推進し，成果を蓄積して服飾文化に関する高水準の学術研究分野を確立し，その成果を世界に発信することを目的とする．情報発信の対象にするのは，服飾文化に関わる全ての学際領域の研究者，並びに様々な産業領域，メディア，デザイナー，舞台芸術等の服飾文化情報を必要とする関係者である．（写真 3）

写真 3　共同研究スペース

機構の体制

文化女子大学の教員を配し，機構長に森川陽（被服材料学），研究員には岡島奈音（近代絵画史），近藤尚子（日本語学），高木陽子（近現代美術史・ファッション文化），田中直人（日本古代史），長沢幸子（ファッションイラストレーション）が所属するのに加え，兼任研究員とされる文化女子大学教員 42 名で構成される．古代史や民俗学，人類学の研究者も含まれるが，全体としては，アパレル，ファッション，被服系の科学を専門とする研究員が多い機構である．

プロジェクト研究

これまでに以下のプロジェクトにあたる共同研究課題を公募した．

・「きもの」文化に関する研究

・東アジアの民俗服飾文化に関する研究

・現代のファッション動態に関する研究

その他の拠点事業

服飾文化研究者データベースを製作中であり，服飾文化研究資料データベースを企画中である．これまでの情報発信の成果として下記展覧会，講演会が開催された．

・展覧会「6+ アントワープ・ファッション展」への協力（東京オペラシティーアートギャラリー主催）
・展覧会「三井家のきものと下絵 ── 円山派がもたらしたデザインの世界 ── 」への協力（文化学園服飾博物館主催）
・文化女子大学秋季特別公開講座「江戸期の小袖と呉服注文」（講演者　共同研究員　共立女子大学長崎巌）
・服飾文化特別講演会「写生的デザインへの転換 ── 応挙の役割とその後の展開」（講演者　共同研究員　国立文化財機構理事長　京都国立博物館長　佐々木丞平）

ファッション文化研究機構の共同研究支援体制の特色は，類例のない，豊富な被服関連資料を収蔵する，図書館や博物館，リソースセンター，資料室を擁するところにある．これらの資料を主な研究対象とした共同研究が進められている．例えば博物館所蔵の三井家着物の調査から，「円山派衣装画と三井家小袖の研究」（近藤尚子他），「三井家伝来小袖服飾類に関する服飾文化史的研究 ── 現存遺品と円山派衣装下絵との関係を中心に ── 」（植木淑子他）といった課題の研究が成果を出している．

○図書館

32 万点の蔵書の内，ファッション関係は 22%，貴重書は 4000 点である．ファッション，民族衣装，服飾史，素材に関する文献，それに 16 世紀初頭から 19 世紀以前に刊行された，ファッションプレート類（ファッションを伝える版画）を貴重書コレクションとして収集する．現在これらの貴重書は，約 209 タイトル，約 55,000 画像が「貴重書デジタルアーカイブ」として閲覧可能である．

○ファッションリソースセンター

文化学園ファッションリソースセンターは，文化女子大学と文化服装学院の付属機関として 1999 年 7 月に開設された．布地サンプルを系統的に整理・保有するテキスタイル資料室，パリコレクションなどファッションを中心とした映像資料を保有する映像資料室，70 余年にわたりファッション服飾関連実物資料を収集，保存してきたコスチューム資料室から構成されている．日本のファッション教育，産業界にも情報公開，交流を促し，世界のファッション情報センターとして機能することを目指している．

①テキスタイル資料室

布地（テキスタイル）関連資料と情報を提供．常時 8000 点を越える基本的な素材から最新の素材までを豊富に収集，展示する．テキスタイル検索コーナーではコンピューター入力により，テキスタイルフォルダーラックから実物資料を取りだすことができ，パソコンコーナーでは，テキスタイルデ

ザインソフトで先染織物やプリント柄がデザインできる．ハンガー見本コーナーでは展示の布地を実際に手に触れて素材を確認でき，カラーボックスコーナーには，色相とトーン，色柄に分けた名刺大の布地がある．実物サンプル添付のテキスタイル関連書籍や情報誌も充実している．（写真 4）

②映像資料室

ファッションに関係する DVD，ビデオなど 11 万 2000 点の資料をパソコン等を利用して視聴できる．世界のコレクション，高田賢三コーナー，パソコンブースがある．（写真 5）

③コスチューム資料室（写真 6）

文化服装学院，文化女子大学のファッションショー作品，公開講座作品を中心に，著名デザイナー作品，企業製品，装苑賞をはじめとする各コンクール受賞作品など多種多様な服飾資料の実物作品を約 30,000 点収蔵する．実物資料はレディス，メンズ，子供服，和服，帽子，靴その他アクセサリーまでを網羅している．ハンガーに掛けられた衣服がぎっしりと並ぶ様は壮観である．

○服飾博物館

服飾専門の博物館で年に 4 回展覧会を開催し，古今東西の服飾資料を中心に 20,000 点を所蔵する．主な所蔵品には三井家伝来の着物，近代の宮廷服，天皇，皇后をはじめ，皇族が着用した装束や洋服が多数．また，彦根藩主・井伊家旧蔵の能装束の他，武家服飾，庶民の服飾，袋物や髪飾り，正倉院裂，名物裂などが

写真 4　テキスタイル資料室

写真 5　映像資料室

写真 6　コスチューム資料室

ある．ヨーロッパの被服としては，18 世紀から 20 世紀にかけての各時代のドレスを収蔵し，時代ごとのスタイルの変遷をみることができる．他にチェコやルーマニアなど東欧の民族衣装もある．アジア・その他の地域では，民族衣装を中心に，中でも中国清朝，パレスチナ地域の民族衣装，インドネシアやインドの染織品などのコレクションを持つ．近年アフリカや中南米，中央アジアなどの民族衣装や染織品の収集にも力を入れている．裂類ではエジプトのミイラの包み布やコプト裂，インカ裂など，装身具では古代新羅の金製装身具，中近東やインドなどの銀製装身具などを収蔵する．「所蔵品データベース」では，2,000 件，10,000 点余りの画像をインターネットを通じて公開し，博物館内の端末では，6,000 件，30,000 点余りの画像と高精細画像 50 点を公開する．

研究ネットワーク形成について

機構を主体とした海外を含む研究機関との連携，共同研究のための研究者ネットワーク構築については，直前まで準備して頂いていた機構長との面会が，多忙のため残念ながら実現せず，研究者側からの状況を詳しくうかがうことができなかったのだが，採択された共同研究グループ内のいくつかは，海外との研究交流があるとのことであった．しかし，そうした関係は，それまでの研究者個人の研究ネットワークを生かし，海外の研究者を班員としたり，または海外の調査地の協力者を得ることに繋がっており，機構が主体となって新たな関係を結んだわけではないとのことだった．今後の研究ネットワーク形成は，ファッション文化研究機構にとっても大きな課題であるという談話であった．

まとめ

共同研究では，同じ目的を持った研究者同士が考え，対話し，受け取り与え合うコミュニケーションを成立させて成果に結びつける．ネットワーク形成といっても，その要望をこちらから発信するだけではなく，協力，受け入れも積極的に行い，そして世界に手を伸ばす前に，身近な足元を見つめ，今一度研究者同士の横のつながりを見直すことが，海外に発展するネットワークの扉になることに気づかなくてはいけないのではないだろうか．

聞き取りから見えてきたことだが，共同研究ネットワークを作るには，二つの方法があるようだ．一つ目は，一から関係性を作っていく方法である．予測のつけにくさ，前方の見えにくさといった困難はあるだろう．しかし，共同研究という野を開拓する．それもまた研究者にとってはフィールドワークだろう．その具体的な方法として，印刷刊行物を交換している研究機関を実際に訪問し，どういった研究機関のどのような研究者に届いているのかを確認してみてはどうだろうか．もちろん，現代では，国内外の研究機関や研究者の情報が，インターネットによって格段に入手しやすくはなった．しかし，パソコンと頭だけではなく，手も足も使い，顔を合わせることでネットワークが作られていくことは，今回二機関を訪問しただけでも，実感したことである．ネットワーク形成以前に，世界各地の非文字資料研究者を把握して，協力者として組織し，国際的共同研究を開始することとは，新しい人間関係を作り上げる過程に他ならないことに自覚的でなければいけない．

二つ目は，既に築かれている，研究を通じた人間関係を，新たな共同研究のために結び直し，解明したい同じ目標のために関係を強化していく方法である．非文字資料研究センターに翻って，それを

実現化させる小さなステップの提案だが，例えば，過去にセンターを訪問した海外の訪問研究員に，ネットワークのための情報を収集し，提供して頂くのはどうだろうか．また，センターより海外の提携研究機関へ派遣された研究員には，渡航国の非文字資料研究機関，研究者の情報を収集，提供して頂くことにする．そして，既にそれぞれの派遣研究員の方は実行されているかもしれないが，帰国と共に協力関係も切れてしまうことのないよう，以降も繋がりを維持するなどといった，既に当センターが蓄積してきた交流資源，人脈を生かすのが良いと思われる．これまで，ネットワーク形成班の枠組みにとらわれ，班員だけを互いに頼りにしながら，目的を達成させなければと考えてきたが，振り返れば，班を越え，もっと大きな輪の中に入っていき協力を求めていれば，さらに成果に広がりが得られたのではないかという反省が湧いてくる．ネットワーク形成のためには，足元から海外にまで視野を自由自在に縮小拡大し，柔軟に網を張り巡らして成果の果実を結べるよう，今後も有効な方法を考え，行動を選択してゆきたい．

謝辞　多摩美術大学芸術人類学研究所では金子雅是氏，文化女子大学文化ファッション研究機構では中山明彦氏にご協力を頂きました．心より感謝いたします．

参考文献など

1 『Art Anthropology』1号　2008年　多摩美術大学芸術人類学研究所
2 『服飾文化共同研究報告2009』 2010年　服飾文化共同研究拠点　文化ファッション研究機構　文化女子大学
3 「多摩美術大学芸術人類学研究所」ホームページ
http://www.tamabi.ac.jp/iaa/
4 平出隆「《フィールド・ミュージアム・ネット》その構想と着手」
http://www.tamabi.ac.jp/iaa/fmn/vision.html　IAA VISION
5 「服飾文化共同研究拠点　文化ファッション研究機構」ホームページ
http://www.bfri.bunka.ac.jp/
文化学園服飾博物館
http://www.bunka.ac.jp/museum/hakubutsu.htm
文化学園ファッションリソースセンター
http://www.bunka.ac.jp/frc/
文化学園図書館 「貴重書デジタルアーカイブ」
http://digital.bunka.ac.jp/kichosho/index.php